慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン･J･ジョンソン著『ラテン･アメリカにおける政治的變革』：中間□の出現
Sub Title	John J. Johnson : Political change in Latin America : the emergence of the middle sectors
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.6 (1960. 6) ,p.88- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600615-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

John J. Johnson: Political Change in Latin America

The Emergence of the Middle Sectors
Stanford studies in history, economics, and political science, XV
Stanford University Press, Stanford, California, 1958, Bibliography. Pp. LXXVI, 272.

ジョン・J・ジョンソン著

『ラテン・アメリカにおける政治的變革』

——中間層の出現——

一　いったい、ラテン・アメリカ諸國には中產階級ないし中間層といったものがあるのか。近代的國際社會において少なからぬ發言力をもっているこれら諸國には、今どき甚だ不躾な、しかもプリミティヴな質問ではあるのだが、じつさい、これほど重要な問題がこれほど無視されてきたことも少ないであろう。問題がプリミティヴであるだけに、なお一層なおざりにしておかれてはならない。

そもそも、西歐における近代的國民國家の形成過程には、影の附き添うがごとき中產階級の動きがあった。それは、中產階級が國民・市民の實體的內容をなすものとして國民形成の推進者であったとともに、近代的國民國家の根本的傾向である民主化の推進者でもあったからにほかならない。

ラテン・アメリカ諸共和國の場合、西歐社會の刺激を受けて十九世紀前半に獨立を完成したとは云え、この獨立革命たるや社會的變革の伴なわぬ單なる政權の交替にすぎなかった。社會的實態は植民地支配の時代と何ら變ることなく、革命—獨裁政治—無政府狀態と留まるところなき流轉のままに、かえって秩序ありし昔日が戀い慕われたほどであった。政權は地主、僧侶、軍人からなるエリート對カウンター・エリートの支配階級が、革命を唯一の政權更迭の手段として爭奪のゲームを展開する。そこには國民・市民の形成も民主化もありえなかったのである。

だが、十九世紀も末期に至り、漸く社會的經濟的技術革命の波はラテン・アメリカにも押し寄せ、その衝動は一九二〇年代になって顯著に感知されるようになった。進步的政治勢力としての都市における中產階級ないし中間層の出現がそれである。しかし、かれらの進出がラテン・アメリカの全般的地域にわたって一擧に押し進められたわけではなかった。前近代的後進諸國であり政治的に異質的な國々において、その中でも比較的進步的なところから個別的に徐々に展開されてきたにすぎない。

このような狀況からして本書の重點は次の二點におかれている。第一に、都市中間層諸集團が歴史的傳統的な支配階級勢力に挑戰して政治的壓力團體にまで發展的展開をするに至つた過程の觀察である。第二には、現段階におけるこれら諸集團の國家的水準の決定作成への參與が、いかに諸國政府の社會・經濟的諸政策に貢獻したか、ラテン・アメリカの指導的地位にあるアルゼンチン、ブラジル、チリー、メキシコ、ウルグァイ五ヵ國の場合を具體的に探求する。

本稿では第一の重點に主眼をおき、紹介するとともに、著者の都市中間層の發展に關する回顧と展望に觸れてみよう。

二　まず、本書に用いられている middle sectors の意味内容について知つておかねばならない。およそ、都市中産階級ないし中間層諸集團といつたものの定義づけは難かしく、用いられる狀況に應じて多分の變化が期待されるものである。

ここでは、西歐的ないしアングロ・アメリカ的意味あいをもつ classes とか strata とかの言葉を故意に避けている。その理由として、著者は「ラテン・アメリカでの經濟的收入や富の觀念が、これまでの社會的地位決定要素としての教養とか家系、あるいは倫理的宗教的觀念とうまく均衡を保つようになつたのはやつと最近のこと」なるがためとする。たしかにラテン・アメリカの場合、政治學における特殊な用法としての middle classes とは社會的位置は相似たものではあつても、その政治的行動樣式がイギリス的意味における産業資本家としての middle classes とは著しく異なつた人々、あるいはその政治的行動樣式を指示するものでなくてはならない。

classes とか strata という言葉に代るものとして、本書では middle sectors をはじめとして middle segments とか middle components, あるいはまた middle elements とかの言葉が交互に頻繁と用いられている。これらは、ラテン・アメリカ以外の地域において採用されたいかなる既定概念にも捉われることなく、要するに middleness の意味を傳えるものとして受けとりたい。また、ここで扱われた Middle sectors の内容をなすメンバーシップは、ある程度以上の教養を備えた俸給生活を營むホワイト・カラー族から産業資本家層、今日の中小企業家と呼ばれるもの、あるいはまた高等教育を受けた教育者、高級官吏、辯護士、醫師など自由業專門職業家群まで廣い擴がりをもつている。したがつて、その譯語としては、中産階級よりもむしろ中間層、中間派の方がより好ましいものと考えられる。

三　都市中間層の擡頭が目立つてきたのは、漸く今世紀に入つて經濟的變革の効果が現われるようになつてからのことであるが、かれらが政治的共通目的のために凝集力をもち連帶性を感じはじめたことの理由として、本書は次の六つの共通の基盤を擧げている。

(1)「都市集中」　俸給生活者、自由業專門職業家群、財產家、金利生活者など、學識であろうと財產であろうとその故に中間層に屬する諸集團はほとんどすべて都市に集中した。歷史的に生產樣式の發達は人間の社會生活にも根本的變化をもたらす。封建的身分的關係から人格の平等を基礎とする契約的關係への移行は、生活態度の傳統的非合理的態度から合理的態度への變更を求める。その必然的結果としておこつた都市集中は中間層發展の第一の基盤となつた。

(2)「義務教育」　ヒューマニズムの立場からして教育の義務制度は中間層諸集團共通のトレード・マークであつた。經濟的變革が進むにつれ、職業教育ならびに熟練工の必要性、ならびに中間層自體の集團勢力擴大のために文盲の一掃を圖る小・中學校の義務化に拍車がかけられた。

(3)「產業化運動」　中間層諸集團にとつて強迫觀念化したこの運動は、ラテン・アメリカでは四段階を經て發展してきた。第一段階では十九世紀末の天然資源開發と加工業の推進であり、それに伴う技術的開發の時代である。第二段階は第一次大戰を挾む時代であり第一段階を强力に推進するための外國資本を導入し、外國人の管理に委ねる資本獲得競爭の時代である。一九三〇年の世界恐慌とともに第三段階が到來する。資本財はもとより原料資源、さらに生產管理までも海外に求める產業の異質的發展に大きな反省が期待されるとともに、產業勞働者の挑戰的勞働運動が波及し、かれら勞働者の集團交涉權が强化された。第二次大戰以後の第四段階においては、重工業育成が叫はれ、鐵鋼業は進步の象徵となつた。ただし、勞働賃銀の上昇と產業發展による利益の均衡とに當面の問題がおかれている。こうして、產業勞働者の發言力が强化されたことは、かれらを指導してきた中間層諸集團の勝利であり、今日の政權を保持している中間層指導者にとつて、兩者の提携は今後も重要なものとなつている。

(4)「ナショナリズム」　この二十世紀的現象は、權力に向つて突進する中間層諸集團がその過程において一大政治的イデオロギーのレヴェルに引き上げることにより起つた。だが、ラテン・アメリカの場合、ナショナリズムの二つの相反する樣相がしばしば獨立して觀察される。その一つは抽象的概念に終始する法的文化的ナショナリズムであり、これの擁護者たちは國家の技術的發展の代償として外國人に天然資源の讓渡ならびに獨占的性質の長期的利權を認めている。しかし、この傾向は、次第に經濟的ナショナリズムに地步を讓ることになり、今日ではナショナリズムはもはや僅かな知識人の抽象的存在ではなく、そのダイナミックなしかも政治的に充滿した形において大衆を導いている。

(5)「國家の干涉」　國家の經濟統制と中間層諸集團は當初からレ

ッセ・フェール主義を拒絶し、それに代わるものとして社會計畫を提案してきた。社會的福祉と產業化は國家統制主義者の第一の關心事であり、國家がその社會的機能を充すべく多大の義務が法制化された。經濟的側面において中間層により次の三點に關して國家の干渉が要請され受諾された。第一に國內產業の保護、第二に外國資本の獲得と同時にその利率の引下げ、そして第三に勞働者集團保護のために生活必需品の價格統制である。

(6)「政黨」　政治的實體としての家族は、都市集中の伴つた近代的交通機關による可動性、社會的相互依存性の增大により、次第に非家族的集團化に導かれる。近代社會における利害の不斷の分化の事實と不斷の調整の要請は、政治體制に抵抗をおよぼす政黨發生の主要條件となる。ラテン・アメリカの諸國では、ある面で政黨のあり方に異質的な性格が見出されるが、共通目的をもつ人々に對して共通の地盤を提供する政黨は、政治的に成長してきた中間層が實際政治の報酬を期待しうる場として強力に支持されている。

四　およそ十九世紀末葉まで、ラテン・アメリカ諸國は地主、教會、軍部のエリート支配階級によつて構成された反動集團の獨占的支配に任されていた。この間、中間層の政治ならびに政府への參與は、暴力に權力の基盤を置き、現狀維持の持續を委任されたカウディーリョたちの決定した政策を、本質的に合法化し、洗鍊し、施行することに限定されていた。

中間層が海外から、あるいは移民に附隨して流入した思想、外國資本、さらに技術的知識によつて刺激された經濟的變革から政治的に利益を受けはじめたのは、ほとんど二十世紀への轉換期に近かつた。この經濟的變革は、中間層の中でも特に產業諸集團の驚異的發展を促した點で大きな政治的役割を果している。企業家、管理人、技術者たちは財力と發言力とをもつ新たな、しかもダイナミックな中間層を代表した。しかし、產業部門が增强されてもなお數的に過少な中間層は、エリートに挑戰して打ち克つためにかれら以外の民衆の支持を求めねばならなかつた。かれらは通常、それを都市勞働者に見出し、ここに數的に支配階級に優る政治的複合體が形成されるに至つたのである。

一方には工場經營者、他方には工場勞働者とまつたく立場の異なつた集團によつて構成された複合體が永らえうるかどうかは、ただかれらの政治的能力が好結果をもたらすかどうかにかかつていた。中間層の指導性は、ここに强くイデオロギー的諸原則に基づき鬪爭をはじめた。選擧過程の制度化と選擧權の普遍化に、產業開發化に、義務教育制度の確立にと、かれらの政治的影響力は要求事項の部分的達成とともにますます擴大されるようになつた。

だが、他面において、疲弊した社會を救濟するためには、じつさ

い相當の無理なことが行われている。たとえば、中間層が政治的繁榮のために主張してきた民衆煽動と權力の集中とは、まつたく正反對の意味内容をもつものでありながら、生き永らえたばかりか、さらに堅固に守られてきたらしい。中間層の指導性は本來、公平な所得の分配と同時に政治權力の均衡を求めている。三權分立は權威の簒奪に對する唯一の實際的保證たりうるものだが、しかし、かれらは經濟的に逼迫している國民や勞働者を救濟する直接手段として、行政部門に權力を集中することを認め、勞働者側の要請に應えた。この事實は、ラテン・アメリカでは法の正義よりも社會的正義が强調されることを如實に示すものである。

このような内部的矛盾を抱きながらも、産業化運動ならびに國家の社會的經濟的責任の增大とともに發展を續けた中間層は政治的新複合體を構成し、今日のアルゼンチン、ブラジル、チリー、メキシコ、ウルグァイの五ヵ國において最大の發言權を獲得し、最大の壓力團體に育つている。國によつて程度の差こそあれ、かれらの二十世紀的急進主義は反動的でないにせよ穩健派により調和され、政府と國民との緩衝地帶ないし信頼するに足る代辯者となつたのである。

五　豫測しうる將來において、中間層はいかなる問題に當面し、いかなる方向に走るであろうか。著者は中間層諸團體の試錬の場として、次のような脅威的問題を提出している。それは、强力な産業化

への投資に反對して爆發するであろう勞働者と、外國爲替問題にもつと强力な解決を求めるにちがいない國内産業資本家との間に立つて、中間層がどのような態度に出るだろうか。勞働者あるいは資本家の何れによる直接的行動手段も政治的複合體を破壞してしまう。

この場合、中間層が採るべき態度を著者は次のように指し示す。中間層が將來も發展するためには國内的にも對外的にも穩健なナショナリズムの立場を採ることが好ましいと。かれらは政權を求める時よりも、政權を保持しているときの方がより過激でないことは記錄が明らかに示している。中間層諸集團、特に産業部門の諸集團はナショナリズムが極端に導かれる場合には、經濟的分裂に陷りやすいことを再三經驗している。一般に、國際的威信を强調する場合には外國からの援助は期待され難い。こうした見地から前記のごとき結論が生れている。

將來に嶮しい道程が横たわる反面、また樂觀的展望の許される材料も多く見出されている。まず、統計資料から中間層の數的膨脹が五ヵ國の何れにおいても全人口の四、五〇パーセントを占めるに至つたことが擧げられている。また、諸國の發展的經濟的特徴が、將來、なおも技術的前進に努力するであろうかれらに重要な政治的役割を約束していること。さらに、中間層諸集團の過去における數々の政治的經驗が、かれら自らの發展のために良き教訓となりうるこ

とを主張する。かくして最後に中間層諸集團への餞けの言葉として、「黄金の時代は過去になく、將來にあるのだという信念をもつて前進すること、この信念が過去の環境の奴隷になることからかれら自身を守るであろう」として稿を終えている。

六　本書はラテン・アメリカに關するこれまでの研究が比較的なおざりにしていた弱點を捉えて、中間層のむしろ活潑な動きを體系的に把握することによつて價値ある貢献をなした。特に、ラテン・アメリカでも産業化の進んでいる五ヵ國のみに限定して論旨の分散化を防ぎ、産業化の展開過程の一齣づつに巧みに嚙みあわせて中間層の行動樣式を動態的に描寫したことは本書の効果を增すものである。著者の洗錬された筆さばきと該博な知識とは、本書のどのページからも感じとられる。卷末の七六ページにわたる bibliography には一千册以上もの文献が載せられており、著者の眞摯なる努力を跡づけるとともに本書の價値を倍加している。

だが一方において、著者が産業化に附隨したものとしての中間層の飛躍的發展を强調するが餘りに、地主、教會、軍部との關係が比較的曖昧にぼかされていることに遺憾の念を覺える。かれら舊支配階級は數的にはもはや中間層の敵ではないが、財力に基盤をおくかれらの政治的影響力は依然として多大である。

さらに、近代社會の擔い手として小農民集團は中間層の一方におけるチャンピョンであつた。本書では、農民團體の動きに關しては殆んど默殺されたにひとしい。もつとも、ラテン・アメリカにおける土地改革は他の社會的産業要素の展開に比してもつとも遲れていることは事實であるが、本書に用いられた middleness の意味系列に當初から小農民が加えられていないのは危險な意識的失敗であつた。

本書は、中間層を推進の母體とした近代的國民國家を豫測しうる將來に求めている。だが、じつさい、道は嶮しく目標にはほど遠いようだ。本稿執筆中、筆者はたまたま春休みを利用して來日されたペルーのトルヒーリヨ國立大學教授エルンスト・ツエレール氏と會談するひとときをもつことができたが、氏は言下にペルーにおける中間層の存在を否定されていた。知識人ですら、じつさい、上・下どちらかの階級に分化されているという。歴史的、文化的遺産を同じく分ちながら、ラテン・アメリカの諸國の近代化に歩みよる速度がまつたくまちまちなのには驚くべきものがあるようだ。

著者、ジョン・J・ジョンソンは一九一二年生れ。一九四三年、カリフォルニア大學卒（M・A）後チリーに留學、一九五二年―三年の一年有餘、合衆國國務省米洲諸國調査局南米部長を經て、現在スタンフォード大學教授として「ラテン・アメリカにおける中産階級」を專門に述講しておられる。

（賀川俊彦）